

平成 24 年度教職大学院派遣研修研究報告書

派遣者番号	管 2 4 K 0 8	氏 名	村上 卓郎
研究主題 —副主題—	肢体不自由特別支援学校児童・生徒の自尊感情を高めるための指導方法の工夫		
所属	東京都教職員研修センター 研修部教育開発課	派遣先	帝京大学教職大学院

項 目	内 容
I 研究の目的	<p>自分のよさに自信をもてないでいる子供、他者との人間関係をつくることが不得手になっている子供が増えていることが指摘されている。今日の学校教育においては、子供一人一人が自分をかけがえのない存在、価値ある存在として自己を肯定的に捉える気持ち、つまり子供の自尊感情を高める教育を推進していくことが課題となっている。</p> <p>このような状況の中、東京都教育委員会の研究では平成 24 年度までに、「自尊感情測定尺度（東京都版）（以下、「自己評価シート」という）」及び「自己評価シート」を補完する「他者評価シート」等を開発し、研究成果の普及・啓発を図っているところである。</p> <p>しかし、特別支援学校における児童・生徒の自尊感情や自己肯定感についての現状をより丁寧に把握したり、そのために「自己評価シート」等を活用したりする取組については始まったばかりの段階である。</p> <p>本研究では、これらの現状等を授業研究等でより具体的に把握するとともに、一人一人の個別指導計画に基づいたきめ細やかな指導を、自尊感情や自己肯定感を高めるための指導方法の工夫を通して、より一層充実できないだろうかと考えた。研究の対象については、授業において少人数のために友達同士の関わりが難しく、教員との関係が中心となる等の課題が指摘されている肢体不自由特別支援学校の「準ずる教育課程」に焦点化して研究を進めることとした。</p> <p>研究仮説 教師は、日常の指導において児童・生徒の自尊感情の傾向を把握し、これらを高めるための指導を意図的・計画的に実施することにより、一人一人の自尊感情や自己肯定感を育むことができるであろう。</p>
II 研究の方法	<p>1 授業研究（観察）による肢体不自由特別支援学校における児童・生徒の現状等の把握 授業研究（観察）については、6 月上旬から中旬の間、都立 A 肢体不自由特別支援学校中学部及び高等部の準ずる教育課程（以下、「A 課程」という）を中心に実施した。</p> <p>2 調査研究による肢体不自由特別支援学校における児童・生徒の現状等の把握</p> <p>(1) 調査研究 1 都立 B 肢体不自由特別支援学校の教員 109 名を対象に、教員が日頃の授業等において児童・生徒の自尊感情や自己肯定感の実態をどのように捉えているのかについての現状を把握した。</p> <p>(2) 調査研究 2 都立 A 肢体不自由特別支援学校の教員 84 名を対象に、教員が日頃実践している授業等を、自尊感情や自己肯定感の視点で関連付けた意識調査を実施することにより、自尊感情や自己肯定感を高めるための指導方法の工夫を充実させるための手掛かりを得ることとした。質問項目は東京都の研究成果である「自尊感情や自己肯定感を高めるための指導上の留意点」を基に作成した。</p> <p>3 中学部 A 課程における実践研究</p> <p>(1) 予備研究 予備研究は、6 月中旬から 7 月中旬までの間、「自己評価シート」及び「他者評価シート」を活用し、授業等において自尊感情や自己肯定感を高めるた</p>

	<p>めの視点をどのように設定できるのかを検討した。</p> <p>(2) 実践研究 9月から10月までの間、抽出生徒1名を中心とした検討、11月及び12月の道徳の時間における授業実践等を通して指導方法の工夫等を検討した。</p>
<p>Ⅲ 研究の結果</p>	<p>1 授業研究（観察）による肢体不自由特別支援学校における児童・生徒の現状等の把握 現状把握の結果から、例えば、教員の説明が中心となったり、教員と生徒との一対一の指導が多くなったりする授業においては、一人一人が自分の考え等を表出する機会が少なくなり、受け身になりやすくなる例が見られる等の現状を把握することができた。教員は、授業等において教員と児童・生徒との関わりだけでなく、児童・生徒同士で多様な意見や考えを交換できる場を設定する等の工夫を図ることが必要なのではないかと捉えた。</p> <p>2 調査研究による肢体不自由特別支援学校における児童・生徒の現状等の把握 (1) 調査研究 1 調査結果の分析から、児童・生徒が自尊感情や自己肯定感を高めるためには、教員による表出あるいは表出手段を確保するための十分な配慮や工夫等により、児童・生徒が成功体験を多くしたり、達成感を味わったり、周囲から肯定的な評価を多く得たりする等の指導方法の工夫が考えられることが示唆された。 (2) 調査研究 2 20項目の調査結果の分析から、教員が、児童・生徒をその場で褒めて評価をする等、すぐに取り組むことのできる項目は設定しやすい一方、一人一人、長所や短所を含めた自分らしさを受け止めたり、相互に認め合ったりする工夫等の項目は、教員の意図的・計画的な設定が必要と考えられることが示唆された。 また、記述式の回答結果については「質的データ分析法」によるデータ解析により、肢体不自由特別支援学校における指導方法の工夫に資するための「指導のためのヒント集」（試案）を新たに開発し、実践研究で検証することとした。</p> <p>3 中学部A課程における実践研究 (1) 予備研究 予備研究では、「自己評価シート」「他者評価シート」により把握することのできる自尊感情の傾向や得点の背景を、一人一人の児童・生徒に応じて、より多面的に捉える必要があることが課題となった。 (2) 実践研究 個別指導計画に基づき抽出生徒の様々な姿を複数の教員により、多面的に検討した。授業実践では、これまでの検討結果を踏まえ「指導のためのヒント集」（試案）の中から「4-2」等の項目を、道徳の時間において自尊感情や自己肯定感を高めるための視点として位置付けた。A課程で指摘されている課題等に留意し、小グループを設定したり、ワークシートに自分の考えを書いて発表し合ったりするなどの工夫を図った。授業実践後の自尊感情の傾向については、中学部A課程全体及び、抽出生徒の「自己評価シート」の得点が、自尊感情を構成する3つの観点全てにおいて上昇した。</p>
<p>Ⅳ 考察</p>	<p>1 研究の成果 肢体不自由特別支援学校児童・生徒の自尊感情を高めるための指導方法の工夫のためには、個別指導計画に基づき、「自己評価シート」「他者評価シート」を活用して一人一人の自尊感情の傾向を把握することが前提となる。これらの結果を踏まえ、複数の教員による検討過程において、児童・生徒を多面的に、より丁寧に理解することにより、児童・生徒の自尊感情を高めるための指導方法の工夫を焦点化することができる。授業等においては、以上の検討結果に基づき「指導のためのヒント集」（試案）を活用し、より具体的に指導の手立てを検討することが可能となる。</p> <p>2 今後の課題 「指導のためのヒント集」（試案）の全項目を、教育活動全体を通して検証するとともに、肢体不自由特別支援学校全体の取組とする。</p>